

## ふたりでるすばん

矢崎 淳子

ねえさんと、いもうとがいます。いもうとは、まだちっちゃくて、ねえさんのいうことが、あまりよくわかりません。「だめよ。それにさわっちゃ」と、ねえさんは、はじめはやさしく、いつてきかせるのですが、いもうとは、きいているのか、いないのか、わかっているのか、いないのか、ほら、こうやって、また、さわってしまいます。きょうもねえさんのきれいにぬったぬりえを、めちゃくちゃにし、ねえさんのたいせつな十二色のいろえんぴつをばらばらにし、ねえさんのぶんのおやつにまでてをのぼ

し、あさから、もう三回もあたまをこっぴどくたたかれました。「もういもうとなんていない。うちからおいだして！」

おやつのと、おかあさんが、いいました。「わかちゃん、いまおそとはあめがすぐくつよくふっているわ。でも、おかあさん、どうしてもってこなくちゃならないものがあるのヨ。おおいそぎでかえってくるから、なほちゃんとおるすばんしていてくれない？」

「ええー！ いやあよう。だって、さみしいもん」

「いまのじかんは、だれもやってこないし、かぎをかけておかし、それに、ほんとにすぐ、かえってくるから」

「てれび つけてもいい？」

「さみしいならいいわ」

「おかし かってきてくれる？」

「いいヨ、じゃ、いいのネ？」

「うん。」

こうしておかあさんはでかけました。げんかんのドアをあけると、おそとの雨が、みえました。つめたいかぜと、ポツポツが、さアッと、ふりこんできます。ねえさんは、あわてて しめました。

「なほちゃん おいで」

ふたりは、てをつないでいって、テレビをつけました。どこのチャンネルをまわしても、おとなのぼんぐみでした。

「なほちゃん、つみぎしようか。」

ねえさんは、つみぎをもってきて、おうちをつく

りはじめました。  
「ほーらおうちだよ」



あと、ひとつで、できあがりというとき、いもうとは、てをふりまわしました。おうちには、ガラガラとこわれました。

「アア」

いもうとは、にこにこわらっています。

「ああ………」

かおを みあわせて いっしょに、

「アア」

「じゃ、なにか ほかのことをする？」

ねえさんも にこにこしながらいいました。ねえさんは、おりがみとシールをもってきました。いつもたいせつにしまっているシールです。

「おりがみに ペったんペったん はって あそぼうか」

いもうとは おやおやおててや、あしにまではってしまいました。

「ああ だめよ。そんなところにはっちゃ。……でも、それも おもしろいね。」

ふたりは、かがみをみながら、おけしょうです。

「えへっ、ふふふ。おもしろいね。」

「きゃっきゃっ」

そのときです。おそらが きゆうにくらくなりました。ゴロゴロ、ピカッ！ おおきなおと！ かみなりです。きつとちかくに、やってきているにちがいありません。

バリバリ！

「きゃあーっ！」

しがみついたのは、ねえさん。いもうとは、……にこにこしています。

「おかあさん。まだかなア」

あめも、はげしくなりました。

きゆうに でんわがなりだしました。

「リーン。リーン。リーン。」

ねえさんは、いままでに、あんまり、なんかいも、でんわにでたことは、ありません。いつも、おかあさんがいたからです。どうしようかなア。もし、し

らないひとだったら……。

「もしもし」

「……はい」

「あア わかちゃん。おぼちゃんだけど、おかあさん、いる？」

「ああ おぼちゃん。ほっとしました。

「おかあさん いない」

「どこへいったの？」

「おかいもの」

「じゃ、おるすばんしてるの？」

「うん」

「ひとりで？」

「なほちゃんと」

「へー、えらい、えらい。じゃ、あとでおでんわするから、おかあさんが、かえったら、そういってね。」

でんわは、きれいでした。うちのなかは、てれびの

おとだけが、ひびきます。

「なほちゃん おいで。」

ねえさんはいもうとを ひぎにのせて、えほんをひらきました。

そのとき、ピンポン、おかあさんが かえってき  
たようです。

「おかえりなさい」

おみやげは、マシユマロでした。ふわふわしていて、おくちにいれると、あまーく、とろけて、おいしいこと。おくちいっぱい、ほおぼって、ごくくと、おちゃでのみこむと、こんなおいしいマシユマロは、はじめてたべたきがしましたって。

(主婦)